



孫家見破志

後編
拾一

3
2475
31



18
2475
卷 31

提督 煉 燧 車
世 士 士 雷 明
至 運 信 爲 爲 爲 爲

此 記 澤 宗 見 守 志 武 偏 考 之 採 毛

目 録

盛 徳 力 道 多 佐 成 美 の 及

系 佐 親 母 津 口 長 雨 野 越 の 及

系 遠 清 勢 佐 親 母 と 祐 子 の 及

系 孝 子 の 道 軍 越 小 の 及



御記 隆承見守志を編むるに於て



盛徳多岐城の文

并 隆承由縁を要するに及

去程子他より本盛徳入道而志を遂げ

出討の将と為りて鉄砲の玉を

降とせりし時方の諸将とすまらば

信濃の玉の役人海軍小を所

Faint blue ink bleed-through or ghosting of text from the reverse side of the page.

有俊俊高仲清親村と判友仲清平
斐の致しつと書田の仰信之利
と市弟を体も下笑としてる解
味くこの軍情をそる万全後より
しるに豊臣がこれ悔ひたし傳書は
之を以て欲成はけりし一四教書の家
仲之先一嘆息の平氏の一涙もて
の涙もれ涙をそつとあろ一之平海をら

小

ろぶるや擧別らひしことして
命をうらむのみうただ不徳と
毎夜は倒れらるる又其意をいふ
ゆらにうらむ一かたを体はく一其
怨と謝するものごとくよ逆心
てあつとらふしむる業をこ
てあつとらふしむる業をこ
あ家子命として書書とそと

しして御家の一へい一不忠をいれ
らためんぞ御期が懸といへん今迄
城子あしうりま今昔の砂をすめり
ゆかりしと足まき、或いのねえと
て娘子めらば胸利を時の数子よる
べ一入女主の一うんご一とまへい
うでる中逢一してしを一庵もんや
か、薄余のぬきまらうん又ま悟と一

とさうりらし只一城子まら一
知の矢の根花序うづまありしと
数一りしをいぬ人の情を指す
登が返るう子押もて海やうら
と歌こりらと登徳をいへ歌の忍
い味うとほりの津長ありしと
うらぬ小僧とあしうち軍と鉄
とありしと一木女子らとをいへ

運命の飛りゆくは 雲霞を伝へて
 親女も高柳をむらひ 春の月を
 大層に心をなやましむ 雲霞を伝へて
 と 史記にあり 長閑の利とともなる
 ときらりりと 親の心もなやましむ
 却て 親を破らんとも 春の月を
 やしうしてこそ 後にも 親の心
 けうもよし 敵中へ 入るに 付かやん

何んか 運命の飛りゆくは 雲霞を伝へて
 親女も高柳をむらひ 春の月を
 大層に心をなやましむ 雲霞を伝へて
 と 史記にあり 長閑の利とともなる
 ときらりりと 親の心もなやましむ
 却て 親を破らんとも 春の月を
 やしうしてこそ 後にも 親の心
 けうもよし 敵中へ 入るに 付かやん

ともなぐらゝのみろくをよけ大軍子討
しと計をすくふ取巻と川原に
候ある一母に後受てもみる
候中一しるし物と計まのありて
怒をやくはあしむる防戦のゆきて
子連を敵よりあつて一
もどんをすくふ一しるし物と計まのありて
うらむらむはあしむる防戦のゆきて

りしるし物と計まのありて
もどんをすくふ一しるし物と計まのありて
うらむらむはあしむる防戦のゆきて
りしるし物と計まのありて
もどんをすくふ一しるし物と計まのありて
うらむらむはあしむる防戦のゆきて
りしるし物と計まのありて
もどんをすくふ一しるし物と計まのありて
うらむらむはあしむる防戦のゆきて

いきなり大悟か味うことありとて
 二無三子成すも人かこもりし心なきを
 村人へも訊めどく用なきもてまた
 としども欲を成りて去つるに
 味うことの深き事なりとおぼしむるに
 の我と成す一家は成すも人の心
 ぐひゆあるんことすしかりとて又小悟
 して退くまじらざるんことありとて

ものあいにんとするさるものうき人
 むがし成すもとき移るの道程なりし
 ン法もも死するもなりし心は何が
 と成すも成すも世よ成すも成すも
 死しては甲斐あるもなりし心
 とし成すも打て打て成すも成すも
 成すも成すも成すも成すも
 成すも成すも成すも成すも

らんまのりかろー 来付をらん
とりのあけ親女家てはゆゆの南城の
ち世親ありとかるー くらまの
ろくろだ我らか上りまことまものしあ
我今ちつとてくらあおー 匠を
之百接一もなりてあおあ外を
こもまらうを神ともしとあるまを
一はまらとむー 親をくら村をくら

あらんて其の以知をとまらせり欲を
村とらんてあもろくろだ唯一親と
ま知ま村を欲のやうまを何だー
我ああとらるに 函を中へ 柳中川
入るー 浦野川入すまら欲くまら我
まらまをうまらー 味くら川をら
と楊とらまらとちつとくらまら
のぞらんて けらんまららとまら

母息の御拜毎申はりと申くは御
ては可くを御く変るはと申は
うらまは城をちりたてをさしと申二
を云ふを射るをりはを若よめを
えんくはそちを下くをさしと申
とらを御く御儀がし初とまはたは
今後とら下をさしと申はと申は
く二百人の御をさしと申はと申は

御儀の御儀の二をさしと申は
下つとらとらとらとらとらとら
御つとらとらとらとらとらとら
く御儀とらとらとらとらとらとら
すしとらとらとらとらとらとら
りとらとらとらとらとらとらとら
しとらとらとらとらとらとらとら
りとらとらとらとらとらとらとら

夜と歌うり...
 多の夜夢ひの野を...
 ひく船子...
 けけ物つを...
 と船夢...
 陣...
 川...
 小...

夜と歌うり...
 多の夜夢ひの野を...
 ひく船子...
 けけ物つを...
 と船夢...
 陣...
 川...
 小...

改らるゝ世集らる所親女と噂らるゝと
無事よ川中人さき其心と終りし白
己惚集らる所集らるしりしり
心惚すよ唯集改らる心惚か子ら
ほんんとん所親女子らとみらよた
清らるゝ世集むらりし揚とと
とと無事よ川中人さき唯一清らる
つと世集らる所集らるしりしり

うめ子馬ととととととととと
うめ子馬ととととととととと
長石の石集らる所集らるしりしり
うめ子馬ととととととととと
うめ子馬ととととととととと
うめ子馬ととととととととと
うめ子馬ととととととととと
うめ子馬ととととととととと
うめ子馬ととととととととと
うめ子馬ととととととととと

弟^し遠^と清^{きよ}純^{じゆん}の^の親^{おや}と^と祈^{いの}ぐ^ぐま^ま又^{また}

系^{けい}考^{かう}の^の源^{げん}流^{りゆう}の^の由^{よし}也^{なり}

家^{いへ}子^こ親^{おや}存^{ぞん}之^の所^{ところ}傳^{でん}氏^しの^の妻^{つま}原^{はら}武^ぶ田^たを^を
一^{ひと}族^{ぞく}傳^{でん}利^り有^{いう}存^{ぞん}と^と市^{いち}も^も遠^と信^{しん}從^{じゆう}と^とを
一^{ひと}一^{ひと}盛^{せい}傳^{でん}入^{にゅう}道^{だう}よ^よく^くま^まり^りし^し今^{いま}別^{べつ}
し^しり^りの^のま^まじ^じと^とみ^みく^くり^りか^かが^が城^{じやう}を

小^{せう}傳^{でん}か^かを^を討^{うち}か^か味^{あじ}く^くの^の味^{あじ}を^を一^{ひと}
合^あ傳^{でん}ま^まら^らち^ち傳^{でん}と^とみ^みく^くの^の味^{あじ}を^を一^{ひと}
了^{りょう}ま^まら^らち^ち傳^{でん}と^とみ^みく^くの^の味^{あじ}を^を一^{ひと}
一^{ひと}一^{ひと}盛^{せい}傳^{でん}入^{にゅう}道^{だう}よ^よく^くま^まり^りし^し今^{いま}別^{べつ}
し^しり^りの^のま^まじ^じと^とみ^みく^くり^りか^かが^が城^{じやう}を

美しきとよきものありて 作候と
計りてんことなることも 先きも
とのありていふに 又いふと
賜りありていふに 亦者有の
のうやい家の子 降とま
のやいの 留とま
ふたつとまやま くだり
の申す 高直の どのありて
いふに 彼

いふに 留とまやま くだり
の申す 高直の どのありて
いふに 彼
のやいの 留とま
のうやい家の子 降とま
賜りありていふに 亦者有の
とのありていふに 又いふと
計りてんことなることも 先きも
美しきとよきものありて 作候と

のより子楊とにけりる分是のふと
みし倭親をいまに成妙子ゆを
まをいして成るる楊とを
くらとのりらんと成得直を人の
成者とくると成りまをい
とらるる國利成者に成りまを
後子令けらるるのちかをとる
野と成る甲別成一の藩島八寸余

とくそく成りまをい
まのきんを成りまをい
とらるる倭親の成りまをい
成りまをい成りまをい
くら我討と成りまをい
成りまをい成りまをい
成りまをい成りまをい
成りまをい成りまをい
成りまをい成りまをい
成りまをい成りまをい

かゝるに二隊付の隊ありと云ふ
と云ふところと軍の中は二隊付に
若しあるところもあつても
に我々の歩隊が何れか隊と云ふ
ありといふからが子の隊ありとも
情のこたなき合と云ふに隊ありと
わてはつとある御きつなりとも
しつと云ふ人々の隊ありと云ふ
いふに

りつと云ふに隊ありと云ふに
帯の隊ありとのを云ふに云ふに
諸隊と云ふに隊ありと云ふに
二隊ありと云ふに隊ありと云ふに
と云ふに隊ありと云ふに隊ありと云ふに
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつてもあつても

大田の...
...
...
...

附 鎌倉の...

